

〔康富記〕寶徳元年八月廿五日、近日琉球國商人京著、令進上藥種并料足一千貫文云々、三年八月十三日、或説云、琉球島船商人去月末著兵庫津之處、守護細川京兆早遣人彼商物撰取未渡料足之間、先々年々料足未進物、及四五千貫無返辨、又賣物抑留、爲島人難澀之由申之間、自公方被下遣奉行三人布施下野守、飯尾與三左衛門、同六郎被糺明之處、得押取之物、自京兆未被返、依之奉行未上洛云々、京兆者前管領也、希代之所行哉、如何之、

〔齋藤親基日記〕文正元年七月廿八日、同日琉球人參洛、當御代六號長史チヤウ於御寢殿庭前三人懸御目、

三拜庭鋪席、

〔實隆公記〕永正六年四月廿八日、阿野相公來臨琉球國口書狀之禮等被談之、廿九日、阿野相公來臨琉球國書狀事大略爲疏、又將軍御書爲假名、其故者、最初通事女房也、仍任其例如此云々、

〔島津家覺書〕慶長十五年五月十六日、家久中山王を率て鹿兒島を發し、八月六日に駿府に參著す、道中之御馳走朝鮮人來朝と同じかるべき旨宿々に兼而爲被仰付之由にて、殊之外結構に御座候、同八日、家久中山王を召列登城す、尙寧緞子百端、羅紗十二尋、太平布貳百疋、蕉布百卷、白銀壹萬兩、御太刀一腰獻上す、家久も御太刀馬代其外品々獻上仕候處に、御代初に、早速異國を從へ、其王を率ひて來朝せしむる事、家久無比類働きの由上意にて御感を蒙り候、同十八日に御饗應被下、御酒宴之上、常陸介殿御鶴殿座を立て舞ひ給ひ、貞宗之御腰物大小家久に被下、同十九日に御暇被下、翌二十日、駿府を立て、廿五日に江戸に致參著候、廿六日に上使を被下候、又廿七日に上使を以米千俵致拜領候、同廿八日に家久、尙寧を召列登城いたし候、尙寧緞子百卷、虎皮十枚、太平布二百疋、蕉布百卷、白銀一萬兩、長光之御太刀致獻上之候、若君様に、御太刀一腰、緞子五拾卷、太平布百疋、蕉布五拾卷、差上候、家久も御太刀馬代其外品々獻上いたし、九月三日に登城いたし、御饗應有、同七日に於御數寄屋に、御手自御茶を被下、同十二日、又登城仕候、同拾六日致登城、御饗應之上、加